

# 日本語における二重対格制約の心理的実在の検討<sup>1</sup>

玉岡 賀津雄<sup>2</sup>

張 婧禕<sup>3</sup>

佐藤 俊樹<sup>4</sup>

DOI: 10.18999/stul.32.115

**要約:**二重対格制約 (double accusative constraint) では, 1 つの節の中に 2 つ以上の対格 (ヲ格) が現れてはならないとされている (Harada, 1973; Hiraiwa, 2002; 柴谷, 1978; 脳波実験は, 備瀬・坂本, 2011)。本研究は, この制約が個別言語の制約として心理的に実在し, 文処理において参照されているかを検証した。日本語母語話者に対して, 実験群として他動詞使役文の正文・非文のミニマルペアと統制群として三項動詞文の正文・非文のミニマルペアを刺激文とする迷路課題 (maze task) を課した。その結果, 二重対格制約に違反した他動詞使役文・非文条件は, 他動詞使役文・正文条件に比べて反応時間が有意に長かった。同様に, 与格 (ニ格) の連続である三項動詞文・非文条件は三項動詞文・正文条件に比べて反応時間が有意に長かった。さらに, 統制群を基準とした二重対格と二重与格の効果量 (正文と非文の反応時間の差) の差を比較した結果, 二重対格の方が二重与格よりも効果量が有意に大きかった。二重対格制約が心理的に実在する強い「制約」として参照されていることを示した。以上の結果から, 二重対格は文処理における強い制約, 二重与格は OCP (Obligatory Contour Principle) の緩やかな制限であると解釈した。

**キーワード:**二重対格制約, 二重与格, 迷路課題, ヲ格, ニ格, 脳波, OCP

---

<sup>1</sup> English title: An experimental study on psychological reality of double accusative constraint by the maze task

<sup>2</sup> Katsuo Tamaoka, Nagoya University, Japan; E-mail - tamaoka@nagoya-u.jp

<sup>3</sup> Jingyi Zhang, Nagoya University, Japan; E-mail - jingyizhang@nagoya-u.jp

<sup>4</sup> Toshiki Satoh, Kohu Seminar, Kohu, Yamanashi, Japan; E-mail - witt5191@gmail.com

## 1. はじめに

個々の言語には複数の制約がある。それらのうち、日本語では、「1つの節の中に2つ以上の対格 (ヲ格) 名詞句が現れてはならない」という二重対格制約 (double accusative constraint) がある。備瀬・坂本 (2011) は、日本語母語話者がこの二重対格制約の統語処理について脳波を測定する実験を行っている。そして、実験の結果に基づき、二重対格制約は心理的に実在しており、日本語の文を処理する際の制約として参照されているという結論に至っている。しかし、備瀬・坂本 (2011) の脳波のデータ分析では、文節提示・間隔時間と脳波の分析時間の長さの問題がある (詳細は、第 2.2 節を参照)。そこで、本研究では、迷路課題 (maze task) の実験により、日本語母語話者による二重対格制約の心理的実在 (psychological reality) を再検討することにした。

## 2. 先行研究

### 2.1 二重対格制約

Harada (1973) の論考以降、二重対格制約 (double accusative constraint) は日本語の生成文法の研究分野において関心テーマの一つである (たとえば、Harada, 1973, 1975; Hiraiwa, 2002; Kuroda, 1992; 柴谷, 1978 など)。この制約は、「1つの節の中に2つ以上の対格 (ヲ格) 名詞句が現れてはならない」というものである (Harada, 1975, p.256; 柴谷, 1978, p. 262)。以下の、(1) と (2) は、使役化 (causative) の例である。

#### (1) 自動詞文の使役文化

- a. 三葉が走った。
- b. 瀧が三葉に走らせた。
- c. 瀧が三葉を走らせた。

#### (2) 他動詞文の使役文化

- a. 瀧が朝食を作った。
- b. 三葉が瀧に朝食を作らせた。
- c. \*三葉が瀧を朝食を作らせた。

(1) は、自動詞文である。(1a) の「三葉が走った。」を使役文にすると、(1b) と (1c) のように表現できる。これらの例文から分かるように、被使役の名詞句(NP; noun phrase) として、「三葉」が与格 (ニ格) の「三葉に」であっても、対格 (ヲ格) の「三葉を」であっても使役文が成立する。それでは、(2) の他動詞文の場合はどうであろうか。(2a) 「瀧が朝食を作った。」を使役文にすると、(2b) のように表現できるが、(2c) のように表現することはできない。これらの例文から分かるように、被使役主の NP として、「瀧」が与格の「瀧に」であれば使役文が成立するが、対格の「瀧を」であると正しい使役文として成立しない。この事実は、2 つ以上の対格名詞句が同じ節の中で共起することを妨げる制約を日本語が持っていることを示している。つまり、(2c) においては、目的語の「朝食を」が既に対格名詞句として生起しており、これに追加して「瀧」が対格になることは許されない。この制約が、二重対格制約である。

## 2.2 備瀬・坂本 (2011)

日本語の生成文法研究の枠組みで提案されているこの制約は、個別言語の制約として日本語母語話者の文の処理に参照されているのであろうか。備瀬・坂本 (2011) は、以下の (3) のような他動詞使役文の正文・非文のミニマルペアを実験群とし、(4) のような三項動詞文の正文・非文のミニマルペアを統制群として、脳波実験を行っている。

### (3) a. 他動詞使役文・正文条件

/<sub>第1文節</sub> 母親が/<sub>第2文節</sub> 娘に/<sub>第3文節</sub> 朝食を/<sub>第4文節</sub> 食べさせた/<sub>第5文節</sub> 。/

### b. 他動詞使役文・非文条件

\*/<sub>第1文節</sub> 母親が/<sub>第2文節</sub> 娘を/<sub>第3文節</sub> 朝食を/<sub>第4文節</sub> 食べさせた/<sub>第5文節</sub> 。/

### (4) a. 三項動詞文・正文条件

/<sub>第1文節</sub> 係員が/<sub>第2文節</sub> 来賓を/<sub>第3文節</sub> 席に/<sub>第4文節</sub> 案内した/<sub>第5文節</sub> 。/

### b. 三項動詞文・非文条件

\*/<sub>第1文節</sub> 係員が/<sub>第2文節</sub> 来賓に/<sub>第3文節</sub> 席に/<sub>第4文節</sub> 案内した/<sub>第5文節</sub> 。/

備瀬・坂本 (2011) の脳波実験では、一つの文を文節 (句) ごとに 700ms (ms; milliseconds はミリ秒) 間提示し、各文節の間に 300ms の空白を入れて、日本語母語話者 21 名の脳波を測定した。なお、実験では、(3) と (4) の「/」は文節の区切りを示し、句点「。」は

単独で提示している。備瀬・坂本 (2011) の実験では、対格 (ヲ格) の連続である実験群の他動詞使役文・非文条件において、非文性が二重対格制約違反による第 3 文節で決まると仮定した。(3) の例文では、「娘を」の後の「朝食を」の時点である。実際、この第 3 文節で、(3a) の他動詞使役文・正文条件と (3b) の他動詞使役文・非文条件の間では、正中線 (Fz, Cz, Pz), 傍矢状洞部 (C3, C4, P3, P4) および側頭部 (T3, T4, T5, T6) において、統語的再解析が行われていることを示す事象関連電位の陽性波 P600 (Hagoort et al., 1999; 大石・坂本, 2004 など) が観察された。

また、統制群である (4a) の三項動詞文・正文条件と (4b) の三項動詞文・非文条件の間でも、側頭部において同様の事象関連電位の陽性波 P600 が観察された。ただし、(3) と (4) の両者には有意な交互作用がみられ、特に (3b) の他動詞使役文・非文条件については、強い P600 が正中線および傍矢状洞部の範囲で観察されたが、統制群である三項動詞文・非文条件では P600 が観察されなかった。この結果をもって、日本語母語話者が二重対格制約を参照して文を統語的に処理していることの証拠とした。

しかし、第 1 節で述べたように、備瀬・坂本 (2011) の脳波データの解析には、以下の問題がある。備瀬・坂本 (2011) は、各文節を 700ms 間提示し、各文節の間に 300ms の空白を挿入している。この刺激提示条件で、他動詞使役文と三項動詞文の第 3 文節の 500ms から 1200ms の潜時帯で P600 の分析を行っている。しかし、1000ms を超えると、第 4 文節が提示されるので、実際には分析範囲として第 4 文節の提示を含んでいることになる。つまり、備瀬・坂本 (2011) が分析した第 3 文節の ERP 成分には、第 4 文節の動詞句の情報が影響している可能性があると考えられる。

### 2.3 迷路課題と第3文節の処理時間の仮説

本研究では、日本語母語話者に対して、(3) と (4) のような 2 (他動詞使役文と三項動詞文) × 2 (正文と非文) の 4 条件の刺激文を使った迷路課題 (maze task) を課し、各文節の反応時間を測定して、備瀬・坂本 (2011) の追実験を行う。

迷路課題 (Forster, Guerrera & Elliot, 2009) とは、図1に示したように、2 つの文節 (意味をもつ文節および意味をもたない文節、たとえば、「朝食を」と「黄職す」) を 1 対として同時にコンピュータのスクリーンの左右位置に提示する。それぞれの文節対 (意味をもつ文節・意味をもたない文節) について、正しい日本語の左右の位置を、正しいほうの左右の反応ボタンを押すことで判断する。次々と文節が順番にコンピュータのスクリーンの左右の位置

に現れるので、被験者は引き続き、語彙性判断を続ける。迷路課題では、文節ごとに正誤判断をしていくと、節の連続は文になる。このことは、はじめに被験者に伝えておく。そのため迷路課題では、顕在意識としては語彙性判断が遂行されているが、潜在意識としては文処理が行われることになる。被験者には、課題をできるだけ速く、正確に実施するように教示する。

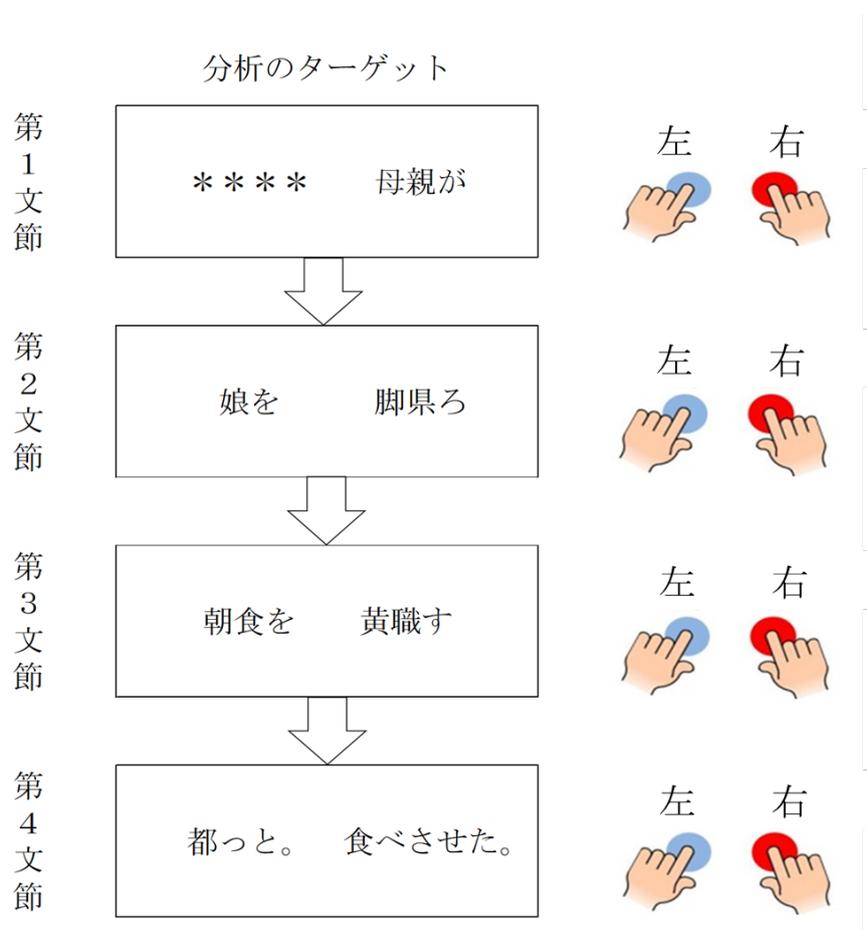


図1. 迷路課題における刺激文節 (句) の提示順序

本実験の仮説は、次の通りである。他動詞使役文・非文条件 (3b) の場合、たとえば、図1の「母親が娘を朝食を食べさせた。」であれば、分析のターゲットである第3文節の「朝食を」で二重対格制約違反により文の非文性が決まる。そのため、二重対格制約が心理的実在性をもち文処理の際に参照されているのであれば、第3文節において、文を組み立てている潜在意識下で、ある種のビックリ効果が起こり、対格の連続である (3b) の「朝食を」は、同じ (3a) の「朝食を」と比べて反応時間が有意に長くなることが予想される。一方、三項動詞文・非文条件 (4b) は、与格の連続であるため、第3文節の「席に」の段階で非文性が決

まらない。つまり、本研究では第 3 文節で、二重対格の 2 つ目のヲ格名詞句が提示されるので、この分節がターゲット刺激となる。また、三項動詞文・正文条件の (4a) と三項動詞文・非文条件 (4b) の「席に」では反応時間に有意差がないか、あるいは違いが小さいことが予想される。さらに、二重対格制約が参照されるのであれば、実験条件である他動詞使役文・正文条件 (3a) と非文条件 (3b) の第 3 文節での処理速度の違いは、統制条件である三項動詞使役文・正文条件 (4a) と非文条件 (4b) よりも大きいと予想される。

### 3. 実験

#### 3.1 被験者

日本語を母語とする大学生 50 名を迷路課題実験の被験者とした。そのうち、男性は 29 名で、女性は 21 名であった。50 名の被験者の平均年齢は 18 歳 10 カ月で、標準偏差は 8 カ月であった。最年長者は 22 歳 5 カ月であり、最年少者は 18 歳 2 カ月であった。50 名のうち、左利きの被験者が 2 名含まれていたが、左・右の反応ボタンの位置は常に一定であるため、利き手の影響はないはずである。

#### 3.2 刺激

本実験に設けた刺激文は、文タイプによる 2 条件 (他動詞使役文・三項動詞文) および統語による正非文の 2 条件 (正文・非文) の 4 条件で統制した。まず、他動詞使役文条件として、(5) に例示される文のミニマルペアを 22 セット (合計は 44 文) 用意した。

##### (5) a. 他動詞使役文・正文条件

/<sub>第1文節</sub> 教師が/<sub>第2文節</sub> 生徒に/<sub>第3文節</sub> 問題を/<sub>第4文節</sub> 解かせた。/

##### b. 他動詞使役文・非文条件

\*/<sub>第1文節</sub> 教師が/<sub>第2文節</sub> 生徒を/<sub>第3文節</sub> 問題を/<sub>第4文節</sub> 解かせた。/

そして、三項動詞文条件も同様に、(6) に例示される文のミニマルペアを 22 セット用意した。

##### (6) a. 三項動詞文・正文条件

/<sub>第1文節</sub> 画家が/<sub>第2文節</sub> 弟子を/<sub>第3文節</sub> 別荘に/<sub>第4文節</sub> 招待した。/

#### b. 三項動詞文・非文条件

\*/<sub>第1文節</sub> 画家が/<sub>第2文節</sub> 弟子に/<sub>第3文節</sub> 別荘に/<sub>第4文節</sub> 招待した。/

順序効果のカウンターバランスをとるために、ラテン方格法に基づき2つの刺激文のリストを作成した。各リストには、上記の4条件から各11文の合計44文が記載された。さらに、被験者の注意をそらすためのフィラー文を12文作成し、各リストに追加した。なお、刺激文はすべて、第1文節・第2文節のNPは有生(animate)、第3文節のNPは無生(inanimate)で統一した。

### 3.3 手順

本研究は、心理学実験ソフトウェア E-prime 2.0 を使用した。(5a) と (5b) あるいは (6a) と (6b) のように類似した刺激文が2回同じ被験者に提示されると、2回目は学習効果で処理速度が速くなることが知られている。そこで、カウンターバランスをとって、同じ刺激文が同じ被験者にあたらないようにした。具体的には、50名の被験者を2群に分けて、25名ずつにして、2つのリストの刺激文(各44文とフィラー文12文で合計56文)をそれぞれ異なる群に使用した。詳細の刺激文は、本論文の付記を参照のこと。

刺激文の提示は、被験者ごとにランダムにした。図1に示したように、被験者に、正しい文節と誤った文節のペアをコンピュータのスクリーンの左右に提示して、左右いずれかが日本語として正しいと判断する文節の正誤判断課題である。キーボード上に設定した左右の反応ボタンを押して、いずれかをできるだけ速く正確に判断するように指示した。また、正誤判断を続けていくと、最終的に一つの文になることも前もって教示した(図1を参照)。刺激を提示してから反応ボタンを押すまでの各文節の時間を反応時間(reaction time)として測定した。本試行に入る前に、4文からなる練習試行を行った。

### 3.4 結果

迷路課題の正答率は、実験群の他動詞使役文・正文条件は97.09% ( $SE=0.73\%$ ;  $SE$ は標準誤差)で、他動詞使役文・非文条件は97.09% ( $SE=0.73\%$ )であった。また、統制群の三項動詞文・正文条件は97.27% ( $SE=0.70\%$ )で、三項動詞文・非文条件は96.73% ( $SE=0.77\%$ )であった。全体的に正答率は非常に高かった。被験者の正答率はきわめて高

いので、正答率は分析の対象とはしない。ただし、数は少ないものの、判断を誤った刺激文については、反応時間の分析から除外した。また、各文節の正誤判断時間が 200ms 以下で、異常に速い反応時間を含む刺激文も誤答として分析から除外した。逆に非常に長い反応時間と思われるような正誤判断はなかった。反応時間については、 $-1000/RT$  の逆数変換を行い、lme4 のパッケージを使用して、線形混合効果モデリング (linear mixed-effects modelling: LME) によって分析した (Baayen, 2008)。参加者と文節の 2 変数をランダム効果とし、他動詞使役文の各文節がニ・ヲまたはヲ・ヲ (二重対格) の語順および三項動詞文がヲ・ニまたはニ・ニ (二重与格) の語順と試行順を固定効果として分析した。迷路課題の第 3 文節 (句) の平均反応時間と分析結果は図 2 に示した。

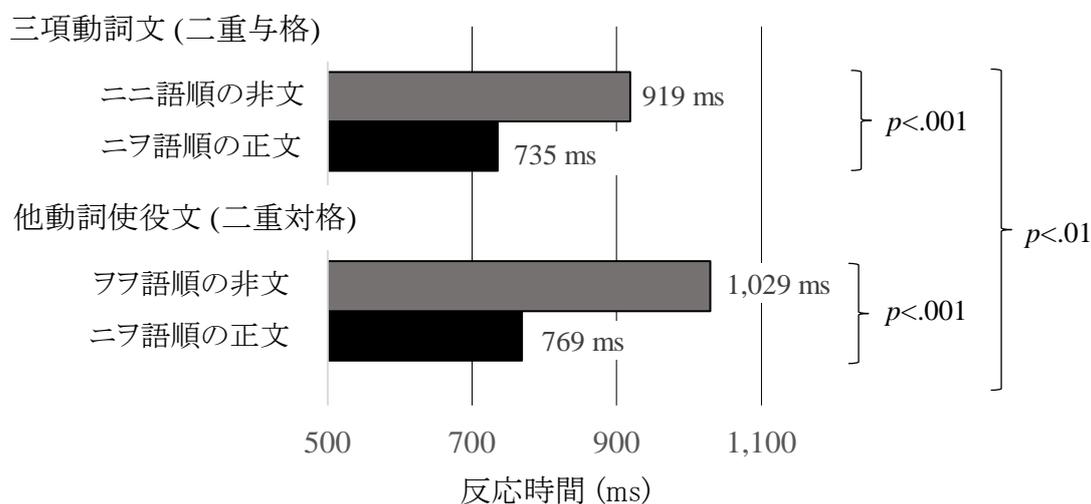


図 2. 迷路課題の第 3 文節 (句) の平均反応時間と分析結果

他動詞使役文のニ・ヲまたはヲ・ヲ (二重対格) 語順の実験の全観測数は 1,051 項目で、最適モデルの誤差の 2.5 の絶対値から外れたデータが 21 項目であった。全刺激提示数は、44 項目  $\times$  25 名 = 1,100 項目であるが、誤った項目、処理が速すぎる場合の項目、さらに上記の誤差での外れデータを削除しているので、分析対象となったのは 1,051 項目で 95.55% になる。分析のターゲットである第 3 文節の分析結果、実験群の他動詞使役文・非文条件 ( $M=1,029\text{ms}$ ) は、他動詞使役文・正文条件 ( $M=769\text{ms}$ ) よりも反応時間が 260ms だけ有意に長かった [ $t(196)=7.13, p<.001$ ]。

同様に、三項動詞文がヲ・ニまたはニ・ニ (二重与格) の語順の全観測数 1,046 項目、最適モデルの誤差の 2.5 の絶対値から外れデータは 22 項目であった。やはり、誤った項目、

処理が速すぎる場合の項目、さらに上記の誤差での外れデータを削除しているので、分析対象となったのは 1,046 項目で、95.09%であった。統制群の三項動詞文・非文条件 ( $M=919\text{ms}$ ) は、三項動詞文・正文条件 ( $M=735\text{ms}$ ) よりも反応時間が 184ms 有意に長かった [ $t(211)=6.37, p<.001$ ]。

さらに、実験群と統制群の非文と正文の対応のあるペアの反応時間の差である効果量について LME の分析を行った。4 つの文の条件において、一つでも誤りがある場合は、そのペアを削除して分析する必要があるので、全観測数は 1,065、外れデータは 35 項目であった。その結果、実験群の効果量が 221ms で、統制群の効果量は 108ms であり、その差の 113ms は有意であった [ $t(41)=3.48, p<.01$ ]。

#### 4. 総合考察

備瀬・坂本 (2011) は、二重対格制約の心理的実在性の有無を検証するために、脳波実験を行った。そして、ターゲットである第 3 文節において、他動詞使役文・非文条件で、脳の正中線、傍矢状洞部および側頭部の広い範囲で P600 を観察した。三項動詞文・非文条件では、P600 が観察されたのは側頭部のみであった。この研究は、日本語母語話者が二重対格制約を参照して文を処理していることの証拠としてきわめて説得力がある。ただ、本稿の第 2.2 節で述べたように、備瀬・坂本 (2011) が分析した第 3 文節の ERP 成分には、第 4 文節の動詞句の情報が影響している可能性がある。そこで、本研究では、迷路課題を使ってターゲットの第 3 文節の処理時間を測定して、二重対格制約が個別の言語的な制約として心理的に実在し、文処理において参照されているかどうかを検証した。結果は次の 3 つに要約されよう。

第 1 に、本研究の迷路課題による実験の結果、二重対格制約に違反した他動詞使役文・非文条件は、他動詞使役文・正文条件に比べて 260ms の反応時間の差があり、これは有意に長かった。本研究は、備瀬・坂本 (2011) の脳波による先行研究を支持する結果であった。やはり、二重対格 (ヲ格) 制約は心理的実在であり、文処理において参照されているといえるであろう。統語論の研究では、二重対格 (ヲ格) については、日本語における言語的な制約として指摘されている (Harada, 1973; Hiraiwa, 2002; 柴谷, 1978)。そして、備瀬・坂本 (2011) と同様に、本実験でも日本語母語話者の内的な言語的な制約として存在し、文処理において参照されていることが示された。

第 2 に、与格 (ニ格) の連続である三項動詞文・非文条件は、三項動詞文・正文条件に比べて反応時間が有意に長かった。本実験を行うにあたり、ターゲットである第 3 文節における三項動詞文・正文条件と三項動詞文・非文条件との間には、反応時間に有意な違いはないか、あったとしてもわずかな違いであると予想した。しかし、実際には、2 回目の第 3 文節で、処理の遅延が起きたことを示している。三項動詞文・非文条件の方が三項動詞文・正文条件よりも反応時間が 184ms 有意に長かった。この結果は、与格名詞句のニ格の連続も、対格名詞句の連続と同様に、心理的に実在していることになる。

第 3 に、実験群である他動詞使役文・非文条件と他動詞使役文・正文条件の反応時間の差 (二重対格) の効果量は、三項動詞文・非文条件と三項動詞文・正文条件の差 (二重与格) 効果量よりも有意に大きかった。つまり、他動詞使役文・非文条件では、二重対格に伴う処理の遅延は二重与格に比べて大きいことが示された。これにより、二重与格については、二重対格ほど強い遅延はないので、むしろ人間の言語処理における緩やかな規則だろうと推測される。

OCP (Obligatory Contour Principle) という原則 (Leben, 1973) があるが、形態素構造制約であり、2 つの高いトーンが連続を認めないという原則である。日本語のモーラの繋がりで同じ母音が連続することによる音韻処理の遅延についても報告されている (Tamaoka & Murata, 2001)。母音が連続すること自体は、日本語で珍しいことではないので、これは音韻処理において同じ母音が続くことによるメカニク的な遅延であろう。さらに、OCP は、音韻だけでなく統語構造においても報告されている (Henk, 2008 など)。本研究の場合は、三項動詞文・非文条件では、第 3 文節においてニ格名詞句が繰り返されると、同じニ格が連続するので、言語処理上で解析の遅れが生じる。これは、ある種の OCP に違反しているため知覚的困難が生じて処理が遅延したと解釈できよう。

以上のように、本研究では、迷路課題の実験結果から、二重対格は文処理における強い制約、二重与格は OCP の緩やかな制限であると解釈する。

#### [参考文献]

- Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data: A Practical Introduction to Statistics using R*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Forster, K. I., Guerrero, C., & Elliot, L. (2009). The maze task: Measuring forced incremental sentence processing time. *Behavior research methods*, 41, 163-171.

- Harada, S. (1973). Counter equi NP deletion. *Annual Bulletin*, 7, 113-147 (Research Institute of Logopedics and Phoniatics, Tokyo: University of Tokyo). [福井直樹編 (2001) 『シンタクスと意味—原田信一言語学論文選集—』 (pp. 181-215), 東京: 大修館書店]
- Harada, S. (1975). The functional uniqueness principle. *Attempts in linguistics and literature*, 2, 17-24, Tokyo: ICU. [福井直樹編 (2001) 『シンタクスと意味—原田信一言語学論文選集—』 (pp. 249-258), 東京: 大修館書店]
- Hagoort, P., Brown, C. M., and Osterhout, L. (1999). The neurocognition of syntactic processing. In C. M. Brown and P. Hagoort (Eds.), *The neurocognition of language* (pp. 273-316), Oxford: Oxford University Press.
- Henk, R. (2008). Identity Avoidance: OCP Effects in Swiss Relatives, In Robert, F., et al. (Ed.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean Roger Vergnaud*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Hiraiwa, K. (2002). Facets of case: On the nature of the double-*o* constraint. In Y. Otsu (Ed.), *The Proceedings of the 3rd Tokyo Psycholinguistics Conference* (pp.139-163), Tokyo: Hituzi Shobo.
- Kuroda, S. (1992). *Japanese syntax and semantics: Collected papers*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Leben, W. (1973). *Suprasegmental Phonology*. PhD dissertation at MIT.
- Tamaoka, K., & Murata, T. (2001). OCP effects on Japanese phonological processing. *Phonological Studies*, 4, 119-126.
- 備瀬優・坂本勉 (2011) 「二重対格制約に関する心理言語学的考察—事象関連電位を指標として—」 日本認知科学会第28回大会予稿集 (pp.716—724).
- 大石衡聴・坂本勉 (2004) 「統語解析の即時・遅延性の検証—P600を指標として—」 『認知科学』 11(4), 311-318.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析—生成文法の方法』 東京: 大修館書店.

玉岡 賀津雄 - 名古屋大学大学院 人文学研究科・教授  
張 婧禕 - 名古屋大学大学院 人文学研究科・助教  
佐藤 俊樹 - 甲府ゼミナール・国語講師

付記：実験に使用した刺激文一覧

他動詞使役文の正文 (a) および非文 (b, \*のついた文)

- 1a 部長が部下に資料を印刷させた。
- 1b \*部長が部下を資料を印刷させた。
- 2a 試験監督が補助員に答案を回収させた。
- 2b \*試験監督が補助員を答案を回収させた。
- 3a 父親が息子に部屋を手伝わせた。
- 3b \*父親が息子を部屋を手伝わせた。
- 4a 先生が生徒に 歌を歌わせた。
- 4b \*先生が生徒を歌を歌わせた。
- 5a 医者が看護師にタオルを交換させた。
- 5b \*医者が看護師をタオルを交換させた。
- 6a 課長が新人に報告書を作成させた。
- 6b \*課長が新人を報告書を作成させた。
- 7a 教授が助手にデータを整理させた。
- 7b \*教授が助手をデータを整理させた。
- 8a 編集長が評論家に原稿を書かせた。
- 8b \*編集長が評論家を原稿を書かせた。
- 9a 母親が娘に朝ごはんを食べさせた。
- 9b \*母親が娘を朝ごはんを食べさせた。
- 10a 管理人が業者に水道管を点検させた。
- 10b \*管理人が業者を水道管を点検させた。
- 11a 大統領が国防大臣に政策を発表させた。
- 11b \*大統領が国防大臣を政策を発表させた。
- 12a 社長が秘書に現金を保管させた。
- 12b \*社長が秘書を現金を保管させた。
- 13a 受付係が参加者に氏名を記入させた。
- 13b \*受付係が参加者を氏名を記入させた。
- 14a 手品師がタレントにトランプを持たせた。

- 14b \*手品師がタレントをトランプを持たせた。
- 15a 画家が弟子に絵を描かせた。
- 15b \*画家が弟子を絵を描かせた。
- 16a 国王が家来にドアを開けさせた。
- 16b \*国王が家来をドアを開けさせた。
- 17a 妻が夫に車を運転させた。
- 17b \*妻が夫を車を運転させた。
- 18a 妹が祖父におもちゃを買わせた。
- 18b \*妹が祖父をおもちゃを買わせた。
- 19a 販売員が客に契約書を読ませた。
- 19b \*販売員が客を契約書を読ませた。
- 20a 犯人が仲間に証拠を消させた。
- 20b \*犯人が仲間を証拠を消させた。
- 21a 委員長が議長に会議を延長させた。
- 21b \*委員長が議長を会議を延長させた。
- 22a 教師が生徒に問題を解かせた。
- 22b \*教師が生徒を問題を解かせた。

三項動詞文の正文 (c) および非文 (d, \*のついた文)

- 1c 主催者が選手をベンチに案内した。
- 1d \*主催者が選手にベンチに案内した。
- 2c 先生が生徒を職員室に呼んだ。
- 2d \*先生が生徒に職員室に呼んだ。
- 3c 父親が息子を塾に送った。
- 3d \*父親が息子に塾に送った。
- 4c 教授が助手を教授会に推薦した。
- 4d \*教授が助手に教授会に推薦した。
- 5c 保育士が子供をバスに乗せた。
- 5d \*保育士が子供にバスに乗せた。
- 6c 警官が新人を現場に派遣した。

- 6d \*警官が新人に現場に派遣した。
- 7c 先輩が新入生を野球部に勧誘した。
- 7d \*先輩が新入生に野球部に勧誘した。
- 8c 警官が犯人を海に投げた。
- 8d \*警官が犯人に海に投げた。
- 9c 母親が娘を居間に放置した。
- 9d \*母親が娘に居間に放置した。
- 10c 画家が弟子を別荘に招待した。
- 10d \*画家が弟子に別荘に招待した。
- 11c 大統領が兵士を母国に帰した。
- 11d \*大統領が兵士に母国に帰した。
- 12c 案内係が来場客を座席に誘導した。
- 12d \*案内係が来場客に座席に誘導した。
- 13c 国王が家来を敵国に売った。
- 13d \*国王が家来に敵国に売った。
- 14c キャプテンがメンバーを部屋に集めた。
- 14d \*キャプテンがメンバーに部屋に集めた。
- 15c 管理人が業者を裁判所に訴えた。
- 15d \*管理人が業者に裁判所に訴えた。
- 16c 医者が患者を手術室に運んだ。
- 16d \*医者が患者に手術室に運んだ。
- 17c 犯人が死体を庭に埋めた。
- 17d \*犯人が死体に庭に埋めた。
- 18c 先生が生徒を廊下に並べた。
- 18d \*先生が生徒に廊下に並べた。
- 19c 妻が子供を保育園に預けた。
- 19d \*妻が子供に保育園に預けた。
- 20c 妹が友達を自宅に泊めた。
- 20d \*妹が友達に自宅に泊めた。
- 21c 国防大臣が兵士を戦地に投入した。

- 21d \*国防大臣が兵士に戦地に投入した。
- 22c 建築家が知り合いを事務所に雇った。
- 22d \*建築家が知り合いに事務所に雇った。

